

Title	<書評>美濃部重克著 『中世伝承文学の諸相』
Author(s)	岩瀬, 博
Citation	語文. 1989, 52, p. 46-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68797
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評・美濃部重克著『中世伝承文学の諸相』

岩瀬博

著者美濃部重克氏が、昭和四四年、本書巻頭の論文「結縁と説話伝承―往生伝の成立―」を引つ提げて学界にデビューされ、続けて編著書『金撰集』、『閑居友』を上梓された時、若き説話文学研究者の姿は燦然と輝いて存在した。その頃から厚知を得ていた私は、本書を繕ぎ、中世説話の研究者が、広く物語の分野をも視点に入れた中世散文学の研究者に転生したことを改めて確認させられる。

本書が『中世伝承文学の諸相』と題されているように、俎上にものぼっている作品も、テーマも多岐に亘る。著者の作品に対する嗜好や、学問に対する関心が那邊にあるかを、目次で一覽しよう。

第一部 説話・物語の成立

- I 結縁と説話伝承―往生伝の成立―
- II 世間話と昔話―昔話「和尚と小僧」の成立―
- III 世間話とはなし―「沙石集」における「近代ノ事」「礎ナル事」―
- IV 鎮魂と家の伝説―御伽草子「玉藻前」謡曲「殺生石」の原話の成立―
- V 語り物と説話・物語―説経「信太妻」の一流流―

- VI 説話・物語形成の基盤―御伽草子、古浄瑠璃、説経「こあつもり」、謡曲「生田敦盛」の原話の成立―
- 閑話休題 五題（「天稚彦草紙」、「弥兵衛風」、「有馬温泉寺縁起」、「幸若舞の『侍ふ』と『候』」、「穴黒々黒主哉の歌」）

第二部 作品の諸相

- VII 『宝物集』 作品の成立と変質―第二種七巻本の成立時期あるいは一巻本と第二種七巻本の作品の性質の相違―
- VIII 『平家物語』 事件とその解釈―撰閲家の王法観あるいは平家の運命についての解釈原理―
- IX 『源平盛衰記』 稗史の筋書き―平清盛の吒枳尼天信仰あるいは平家の運命についての解釈原理―
- X 御伽草子 表現の仕組み―絵と画中詞―
- XI 御伽草子『福富長者物語』 本文の成立―物語と絵と文章と―
- XII 御伽草子『いそざき』 テキストの変容―絵巻から絵草子へ―

ⅩⅡ 御伽草子 接触と了解—作品の座的享受—

ⅩⅢ 昔話集「めのとものがたり」「そそくり物語」 昔話の文

章化—冷泉門堂上派歌人の作文の会

伝承文学と言ひ時、口承による文芸、口承の世界を色濃く文章表現に持ち込んだ文学を先ずは意味しよう。やや広く、口頭によって伝承されながらも、文字を媒介にしている点で、口承文芸とは嚴格に區別される文芸をもこれに含めることもある。あるいは書かれた文学でも、伝承性豊かなものを含める場合がある。その場合「伝承性」というタームは、例えば『古事記』、『風土記』のように、口承の世界で培われたものを示すものとして用いられるのが普通である。もちろん書承文芸にも「伝承性」はある。口承書承の両面に渡る説話文学にあって、伝承性はとくに重要な要素であるが、伝承性があるからといって書かれた説話文学を直ちに、伝承文学とは呼称しない。

章題から、世間話、昔話など口承文芸そのものが、あるいは説経「信太妻」、説経「こあつもり」、『平家物語』のように文字を媒介にしながらも、口頭によって伝承された作品が論じられていることが分る。しかし、目次の全体を見渡し、氏の伝承文学の概念を理解することはなほだ困難であらう。しかも後述するように「世間話と昔話—昔話『和尚と小僧』の成立—」の実際は『沙石集』の論である。あるいは「伝承文学の系譜の上に立つ作品」として『宝物集』が論じられ、知識人の个性的和歌史観が生んだ異本のオリジナリティーが浮き彫りにされる。通説し終わっても、著者の「伝承文学」は容易に納得されないのではあるまいか。著者とは伝承文学の概念を異にする私は個々の論文に言及する際なお触れることになる

う。

「あとがき」には、書名の意図を「中世の伝承文学は、呪的な心意の支配する口承世界の内のものとしてのみならず、そこに生れた文学的原像が歴史社会的な要件に触発されてかたちをなす面においても捉えられなければならないと考える」、「伝承文学の中世におけるかたちは、歴史社会という変化の相と伝承文学の不可変の領域とのせめぎあいの上に現象している」と述べられているが、本書の卓越しているのは、何と云っても伝承性を装っている中世の作品が、伝承性を越えた「歴史社会的な要件に触発されてかたちをなす面においても捉えら」れている点にある。

「Ⅰ 結縁と説話伝承—往生伝の成立—」は、「結縁」の意味とその実践的側面が諸資料に博捜され、往生人が引撰結縁案を持つという信仰が流布し、結縁の供養として往生人への讃嘆が行なわれる。さらに往生人の話を結集し、伝承し、表現する行為も、結縁の供養とされ、往生伝が編纂される。そうした認識は、往生伝とは異なる自照性の強い草庵の文学「閑居友」、『撰集抄』、『発心集』の表現の背後に継承されていることが説かれる。ここでは正に歴史社会的な要件としての思想と行為に触発されて生じた説話の信仰の心意とその表現の意味が抉剔されている。

「Ⅱ 世間話と昔話—昔話『和尚と小僧』の成立—」は『沙石集』の「和尚と小僧」が採り上げられ、昔話の「和尚と小僧」とは異なって、和尚は慳貪で、世俗的な破戒僧という明確なイメージがあり、説話における笑話の主人公としての僧の登場は、鎌倉末期の僧徒の低下という現実を背景にしていると説く。劣位にある小僧がその知恵によって一時的に優位をしめるところに笑いがある昔話

とは異なる鎌倉末期の「和尚と小僧」はその組み合わせを笑話の枠として世間話から成長したと言う。『沙石集』の「和尚と小僧」論として、見事に「そこ（私注、口承文芸）に生れた文学的原像が歴史社会的な要件に触発されてかたちをなす面においても捉えられて」おり、教えられるところは多い。しかし、「世間話と昔話―昔話『和尚と小僧』の成立―」という題名との懸隔はどうであろう。むろん昔話「和尚と小僧」に触れてはいるが、論じられているのはあくまで『沙石集』の「和尚と小僧」である。初出の論題は、「沙石集と和尚と小僧」である。本書に掲載されるに当たって『沙石集』の論が若干削られてはいるが、論旨は変わらない。本書の体系化を図っての改題であろうと察せられるが、「伝承文学」に引き付けの強引な改題と思うのは私のこだわりであろうか。

Ⅲ 世間話とはなし―『沙石集』における「近代ノ事」『慥ナル事』は、世間話とはなしに関わる無任の説話の方法を説く。無任は同一公共圏の出来事を「近代ノ事」「慥ナル事」と強調し、夥しい出来事を世間話として『沙石集』に書き留めた。そうしてそれらの出来事、世間話に咄の枠をかぶせて笑話へ変身させていく。無任のそうした話術は近世のはなしに繋っていくという。話題が多岐にわたり、ために論旨に不透明さが残る。

Ⅳ 鎮魂と家の伝説―御伽草子『玉藻前』謡曲『殺生石』の原話の成立―は「玉藻前物語」と原玉藻前物語の二つのテキストに関わって、さまざまな問題が論じられている。一、二章は「玉藻前物語」の考察で、王法障碍の狐・玉藻前像の形成が台密の狐神観に近いものによるとし、物語の主題は狐による王法の危機と源氏による回復であるとし、その歴史性から、成立を南北朝時代と憶測する。

三章以下が原玉藻前物語の考察である。ここでは殺生石伝説が玉藻前の怨霊に対する源翁禅師の鎮魂と関わり、禅師の布教活動を助けた三浦介の子孫の狐信仰と関わって伝承されていたことなどが説かれている。多くの文献を博捜し、資料の意味を押えながら吒天信仰を緻密に検索していく著者の方法は見事で、教えられることは多い。感想を一言つけ加えれば、御伽草子『玉藻前』が、三浦介の子孫の狐信仰や源翁禅師の鎮魂行為など関わる原玉藻前物語に胚胎するとしても、台密の狐神観に近いものとされる御伽草子の玉藻前像とどう脈絡するのか、三浦介の子孫が稻荷神を祭っているとしても、果して王法障碍の狐神とどう結びあっているのか、小山氏の乱と関わって、玉藻前の厄災による葦名氏一族の危機意識と説かれる以上、そのあたりの説明が欲しいところである。「玉藻前物語」の考察と、原玉藻前物語の考察の連係が乏しいように思われる。

Ⅴ 語り物と説話・物語―説経『信太妻』の「源流」は「命の賭け物」をモチーフとした説経『信太妻』第五段の原話についての新見が提出されている。氏は「簾笠抄」と「信太妻」を比較し、両書は直接の交渉はないものの、「簾笠抄」流の物語が古態で、それに文芸的脚色したのが「信太妻」とする。更に類似の説話を持つ鎌倉期成立の「五常内義抄」と「簾笠抄」を比較し、この物語の、妻に心を許すな、自説に偏執するな、大酒を飲むなという、師から弟子に与えられた訓戒を検討し、訓戒に呼応する筋の展開に不備な点のあることを確認する。そうして自説に偏執するなという訓戒と筋を持ち、清明の蘇生に犬の肝臓が使われるという昔話が沖繩に伝承されている事実を指摘し、更に犬の肝臓のモチーフを持ち、しかも「簾笠抄」に見える清明の生命指標である葦も描かれる岐阜県の昔

話を指摘する。その上で犬の内臓を持つという陰陽師・唱門師が伝承する清明の「命の賭け物」をモチーフとした始祖伝説を想定し、『信太妻』第五段の原話を解明している。文献を基本に置きながら、一方で民間説話を閑却することなく、資料としての価値を認め、それをを用いながら中世の伝承世界を解析する美濃部氏の方法が見事に成功している。

「VI 説話・物語形成の基盤―御伽草子、古浄瑠璃、説経『こあつもり』、謡曲『生田敦盛』の原話の成立―」は、室木弥太郎氏が智恩寺や御影堂を一括りにした高野聖の唱導を、二段階の成立・展開に分析したもの。先ず、知恩院をめぐる平家の遺子、法然の高弟、法然の賀茂信仰、知恩院開創者の賀茂信仰、さがり松、賀茂信仰に付随する神の子遯遁譚など、物語を構成する諸要素と物語形成の原動力をなす知恩院の勸進活動の存在を明らかにしながら、知恩院における平家の遺子で、法然の弟子である源智を主人公とする物語の成立を説く。その物語を下敷きとして、「こあつもり」は、小教盛による父の霊の救済の物語として成立したが、その成立には、物語における熊谷、北の方の存在から考えて、時宗尼、萱堂聖が出入りした御影堂の唱導が関わったと説く。作品の形成論は、一般にややもすれば、実証性に乏しい絵論的観念論に墮す傾向を持つが、氏の実証的分析は説得力を持つ。「こあつもり」の生成論がここに極まった感のする卓越した論文である。

後半はテキストに関する考察である。絵巻などの草子系と、説経などの語り物系の成立に関して、語り物系の先行説が説かれる。草子系は松本隆信氏が最古本とされる甲類本の誤謬、即ち、小教盛、出家して西山の善恵上人（証空）とする誤りは、証空の弟子、宇都

宮頼綱蓮生房を熊谷直実蓮生房と誤解した結果とし、甲類本の古態説に疑問を投げかけている（初学者のために一言付け加える。氏が松本隆信氏の絵巻類の系統論を採りあげて「お伽草子の本文について―小教盛と横笛草紙」と注しているのは、『在外奈良絵本』の「各個解説」の誤りである）。

以上で「第一部 説話・物語の成立」が終り、「第二部 作品の諸相」の間に「閑話休題 五題」が入る。紙数の都合で省かせていたのだが、『平家物語』に歴史的文脈のコードを読み取る「穴黒々黒主哉の歌」など、示唆深い小品が並ぶ。

「VII 『宝物集』 作品の成立と変質―第二種七巻本の成立時期あるいは一巻本と第二種七巻本の作品の性質の相違―」は標題どおり、第二種七巻本の成立時期を集中の歌人の官職を手がかりとして、寿永二年の成立であることを説き、慎重な態度を取りながら、一巻本の成立時期を治承四年と憶測し、第二種七巻本を一巻本の改編とする。その証明過程で、和歌の数が著しく多い第二種七巻本の和歌に関して、平安末期の時点で近代意識と当代意識が強く存在することが摘出される。

その上で長徳元年の貴頭の出来事を描いた一巻本の記事に対して、第二種七巻本が同じ記事を採りあげながら、生死無常の一般論へ拡大し、長徳元年を越えて、当代に通じるものに展開している構造を明らかにする。そうして著しい和歌の増補は、寿永、文治の歌壇人の当代和歌史観による構造的な改編を意味すると主張する。

「VIII 『平家物語』 事件とその解釈―撰関家の王法観あるいは平家の運命についての解釈原理―」は、平家一門に盛者必衰の具現を必然のこととする解釈原理を、王権および摂籙権の侵犯と説き、

『平家物語』の王法親は、神代に天照大神と天兒屋命の誓約によって、その子孫に与えられた王権と撰籙権の神授説に由来するとし、その神授説を当代の文献で検索したうえで、『平家物語』は神によって破滅が運命づけられ、しかもそれを知ることなしに自らを破滅に追いこんでいく平氏の二重の悲劇性が表現されていると指摘する。

『平家物語』の解釈原理を異本に追究したのが、Ⅹ 『源平盛衰記』 稗史の筋書き―平清盛の吒呷尼天信仰あるいは平家の運命についての解釈原理―である。『源平盛衰記』の清盛の官途昇進、成親の大将を望む祈願、褒姒説話、経正の竹生鳥詣の記事には、吒天信仰のコードが隠れた脈絡をなしていると指摘し、『仁王経』の斑尾王説話などの吒天信仰の分析を通して、吒天信仰が平家一門の盛衰の解釈原理となっていることを指摘し、『源平盛衰記』の稗史的性格の原因を説く。氏が『宝物集』論で、「作品の伝本に関して異本と称し得るものはひとしくオリジナルスとして扱うべきだろう」と、原作を改作した七巻本の作者の和歌史観を扶劇した異本観がここでも見事に結実している。伝承されてきた作品に対するに改作者の新たな解釈原理に依って、個性的な作品が再生されている仕組みが氏の直観力と、直観力を裏付ける資料の読み取りとに依って描き出されている。『平家物語』諸本の個性的解釈原理がそれぞれに識別されるなら、諸本の性格を鮮明に映し出す可能性がある。

長い間、等閑視されてきた御伽草子の絵や画中詞が物語に重要な機能を持つものとして研究の視野に入ってきたのはここ数十年のことである。「Ⅹ 御伽草子 表現の仕組み―絵と画中詞―」はその研究の流れにそって、先学の研究を辿ったうえで、『多賀神社参詣曼荼羅』、『春日浄土曼荼羅図』、『稚児今参物語絵巻』、『風草子』、

『弥兵衛風』、『いそぎ』などを取り上げ、絵や画中詞が本文と異なる表現の領域として、物語を風俗、文化あるいは日常的意の中に入れて、作品に新たな命を与える様式として機能していたと説く。

Ⅺ 御伽草子『福富長者物語』本文の成立―物語と絵と文章と―は二巻本『福富草子』下巻の錯簡を、前後の場面を繋ぐ働きをする媒介物の発見など、絵の読み取りで正し、春浦院本の欠逸部分を除けば、クリーヴランド本の本文と同一であることから、クリーヴランド本が既に錯簡を有し、欠逸前の春浦院本を模写したという春浦院本原本説を主張し、一巻本『福富長者物語』の本文が絵を解く戯文として、現実から遊離した御伽草子の架空の物語へと仕立てなおされ、異質の作品を作りあげたと説いている。それを可能としたのは、『福富草子』の物語が持つ流動性に依るものだといっている。一巻本の理解は納得が得られようが、春浦院本原本説はなお議論があらう。

Ⅻ 御伽草子『いそぎ』テキストの変容―絵巻から絵草子へ―は『いそぎ』祖本のかたちを推考する作業を通して、祖本の画中詞が、祖本とは別のかたちを取る伝本でどう処理されているか、その実態を整理し、絵巻が冊子に変形するに従って生じるテキストの変容を追究した論である。

Ⅼ 御伽草子 接触と了解―作品の座的享受―は御伽草子の接触と了解の仕方を、さまざま「見る」「読む」「書く」享受の実態に触れながら、論じたものである。真名本『玉藻前』を女性のために仮名本に書き改めたという『上井覚兼日記』の記事を引用しながら、もとのテキストの享受の上に、書く行為が加わり、新たな

るテキストが生れる実態を示し、読み見る座的享受の仕方 of 種々層を説く。読む行為は絵に及び、絵を読むことによつてテキストが了解される図式を『いそぎ』を例に説いている。『いそぎ』の祖本のように、大型の、画中詞を伴つた本が座的享受に適し、そこでは読み手が一座の享受者であり、テキストを座に開放し、能動的享受が可能となる接触が成立する。お伽草子の可笑性、平俗性、啓蒙性、祝儀性は、そうした享受の仕方背景として表現されると説く。

『XIV 昔話集』めのものがたり』『そそくり物語』昔話の文章化―冷泉門堂上派歌人の作文の会―は近世の作品を論ずるもの。昔話が赤本による読み物として板行されていた安永の頃、歌人たちが「鼻高扇」、「猿の生肝」、「猿地藏」など昔話を、御伽草子・『宇治拾遺物語』風に作文していた。文藻に堪能な人々が集つての清遊の場で、仮名の文章に作文された『宇治拾遺物語』、そういう状況を想像してみたくなるような作文の会が、冷泉門堂上派歌人であり、將軍家の御伽衆的存在であつた成嶋道筑由縁の堂上派歌人たちによつて行なわれ、『めのものがたり』、『そそくり物語』が編纂された様子を明らかにする。

氏は欧米の叙事詩研究者の理論を要約して「物語が口頭で制作されてゆく時、その形態は享受の状況に即して長短さまざまに流動する。それ故に物語を捉える場合、オリジナスとして特別扱いすべき形態を考え他の諸形態とそれとの間に系譜的關係を見ようとするのは、その本来の姿から離れてしまう所為となる。むしろ表現されたすべての形態をオリジナスとして、流動し変容する中で物語を捉えるべきである」(二三三頁)と紹介しているが、本書に展開されている美濃部重克氏の研究視点は、これら欧米叙事詩研究の理論の豊

かな発展である。『宝物集』、『源平盛衰記』の他、『福富長者物語』、『いそぎ』が「オリジナスとして、流動し変容する中で物語を捉え」られている。しかし、如上のテキスト観に基づきながら、氏の研究対象、研究方法は叙事詩理論の「物語が口頭で制作されてゆく時」を越えて、書承による制作の問題に発展している。そこでは作者の個の思想、資質が問題とされ、口頭伝承の持つ重要な要素である伝承性はむしろ捨象されている。本書にはほぼ一貫して流れるその文芸観と、それに基づく中世に流伝する書承文芸としての作品の分析方法が、伝承の位置の穿鑿と、著者の資料の読みの深さとの確さに裏付けられて、確立している点に本書の独自性があり、価値がある。

しかも氏は「物語が口頭で制作されてゆく時」を、書承關係に限定しない。『玉藻前』論、『信太妻』論は、実際に口承文芸を調査し、そこで得た資料や、伝承の実態を、書承關係による伝承と関わらせ、口承、書承にまたがる総合的史的展望がなされている。

氏の口承文芸に対する興味は、多くの論文に伺えるところであるが、『沙石集』、『めのものがたり』論に見られるように、著者の口承文芸への関心は、語りの表現や、語り手の資質ではなく、それを素材として生れた新たな文学作品、語りを文字として表現する文学者の在り方へと回路していく。口承文芸史に流れるコードの発掘など、氏の口承文芸史考を改めて期待したい。

(昭和六十三年八月五日刊 A5版三三六頁 八五〇〇円 和泉書院)